歯周病

犬・猫の口内トラブルで一番多い疾患です。

炎症の進み具合によって「歯肉炎」と「歯周炎」に大別されます。

歯肉炎（しにくえん）

初期段階の症状、歯周ポケットに食べかすなどがたまり細菌が繁殖し始める。歯は白から黄色、茶色っぽくなり、歯肉は赤く腫れてくる。

歯周炎（ししゅうえん）

歯肉炎が進行し、歯肉以外にも炎症が及んでいる状態。歯周ポケットが深くなり、細菌はさらに繁殖しバイオフィルムを作りだす。

歯肉の赤みと腫れは増し、歯垢や歯石も増え口臭が感じられるようになる。場合によっては痛みが伴うこともある。

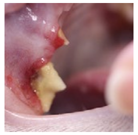
※バイオフィルム：ぬるぬるした粘膜状の物質、バリアの役割を果たしている。
抗生物質などの浸透がブロックされ、薬での治療が困難とされる一因である。

猫に多い口内のトラブル

歯頚部吸収病巣（しけいぶきゅうしゅうびょうそう）

歯肉と歯の境からエナメル質が溶け出して、アゴの骨と癒着してしまう猫独特の病気。
神経が露出してしまい、かなりの痛みを伴い、食事を取るのも困難になる。

慢性歯肉口内炎（まんせいしにくこうないえん）



歯肉や口腔粘膜が慢性的に炎症を起こしている病態。口内の細菌や感染したウイルスに対する過剰な免疫反応であったり、代謝異常や栄養不足の場合など、その発生原因は様々です。
歯周病を併発しているケースも少なくありません。

※「口臭がきつくなった」「ご飯を食べにくそうにしている」などの場合は、お口のトラブルに限らず、なんらかの疾患を抱えている可能性もあります。

犬に多い口内のトラブル

破折（はせつ）**咬耗**（こうもう）

破折とは歯が折れてしまうこと、咬耗とは歯が磨り減ってしまうことです。動物の骨や蹄などの硬いおやつやガム、木製等の硬いおもちゃが原因となりやすく、これにより神経がむき出しになると痛みで何も食べたれなくなってしまうこともあります。
硬すぎる玩具を与えないよう十分注意してあげましょう。

眼窩下膿瘍（がんかかのうよう）

口内の炎症が深部に広がり、上顎の骨を溶かしてしまい眼の下あたりが腫れ上がり、さらに進行すると膿が出てくる病気。

乳歯遺残（にゅうしいざん）

成長とともに抜け落ちるはずの乳歯が、歯が生え換わる時期を過ぎてもそのまま残ってしまっている状態。原因は明らかになっていませんが、放置しておくと歯垢がつきやすくなり、歯周病リスクは高まり、噛み合わせにも影響したり、折れて根本が残ってしまうと腐ってしまうことも。7ヶ月齢くらいで一度獣医師さんにチェックしてもらいましょう。

口鼻瘻管（こうびろうかん）

主に犬歯周辺の炎症が進行し、上顎の骨を溶かして鼻に貫通してしまう。口内の細菌や食べかすなども鼻に入り込み、くしゃみや鼻血が出ることもあります。

※一見、お口のトラブルでなくても、鼻水が多い、鼻血が出た、食べ方がおかしい、顔が腫れた、膿が出てきたなどの症状の原因が歯周病となっている場合も少なくありません。

井直商事株式会社
〒659-0012 兵庫県芦屋市朝日ケ丘町4番7-305
☎0797-23-2663
http://inaocorp.co.jp/

2018.08

3歳以上の犬猫の
8割が「歯周病」

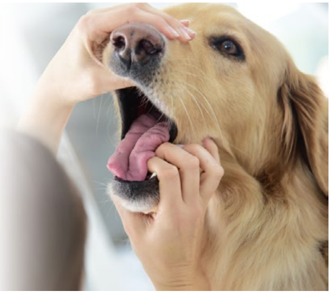
愛犬・愛猫の健康を守るオーラルケアとは？

inao corporation

健康の基本は

まず

オーラルケアから!

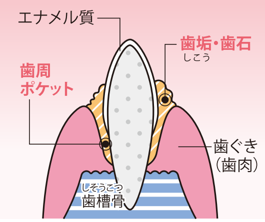


オーラルケアは、歯周病予防が中心

人が毎日、歯磨きをするのと同じように、犬猫も日々のオーラルケアは欠かせません。ただし、犬猫の口内環境は人とは違います。
アルカリ性のため虫歯菌が繁殖しにくく虫歯になりにくいのですが、人よりもずっと歯周病になりやすいという特徴があります。
そのため、**犬猫のオーラルケアは歯周病対策中心**となります。

歯周病を引き起こすのは歯石ではなく歯垢

犬猫の歯周病は3歳以上の8割が罹っていると言われています。
ここで注意したいのが、歯周病の原因は歯石ではなく歯垢ということです。
歯垢とは食べカス、さらに唾液中の成分からできる歯の表面についているネバネバしたもので、その**約70%は細菌**です。
この物質が、**歯と歯肉(歯茎)の隙間(歯周ポケット)に溜まることで炎症を起こす病気が歯周病**です。
見えている歯は綺麗でも、実は見えない歯肉の中で歯周病が進行している…ということも少なくありません。



進行すると口内だけに留まらない、怖い病気

歯周病が酷くなると歯が抜けたり、細菌が繁殖することで歯根周囲の骨まで溶け出し、口の中や外に穴が開いたり、顎の骨が折れることもあります。
また炎症部から細菌が入り体内を巡ると、心臓や腎臓、肝臓などの内臓、さらには脳にも疾患が生じます。
口内だけでの問題でなく、全身に影響を及ぼし、命に関わる事態になってしまいます。

オーラルケアの

正しい

知識を！

プラーク(歯垢)をコントロール(除去)することが必要

ペットショップなどでも歯磨きや歯石取りのメニューを見かけますが、表面的な歯垢・歯石を取るだけの施術が多いのも実情です。
歯石とは歯垢に唾液中のミネラルが沈着して石灰化したもの。
歯石の表面はザラザラしているため、放っておくとさらに歯垢が付着します。
歯石除去すること自体は大切なことですが、それだけでは本来の目的である歯周病の予防、歯垢を除去することにはなりません。
愛犬・愛猫のために、「歯石の除去だけでは不十分である」という正しい知識をもってもらうことが大切です。

麻酔のリスク、治療が遅れることのリスクを良く考えましょう

理想的な歯周病治療は、歯の表面の歯石や汚れを全て取り去り、歯周ポケットの中も綺麗にし、歯に新たな汚れをつきにくくするため、研磨して表面を滑らかにします。
これらの処置はほとんどの場合、全身麻酔をかけて行います。
ただ、歯周病は若い子よりも圧倒的に老犬・老猫に多く、全身麻酔はどうしても身体への負担が大きくなってしまいます。
歯周病の進行具合にもよりますが、治療が遅れることもまた、愛犬・愛猫の健康にとって望ましくない結果になります。
獣医師さんによく相談し、愛犬・愛猫にとって最良の判断をしましょう。

毎日の

オーラルケアが

必要！

歯周病は、治療よりも予防の方が簡単な病気です

一旦、歯周病になってしまうと治療が大変ですが、日々のオーラルケアで予防をすることの方が簡単な病気でもあります。
人の口内の歯垢は平均で2週間～3週間程度で歯石化しますが、口内環境の違いから、**犬の歯垢は３～４日程度で、猫の歯垢は７日程度で歯石に**変わります。
人の倍以上の速さで歯石化し始めることを考えても、犬や猫は人以上に毎日のオーラルケアが必要になります。
歯周病を防ぐことは歯を守るだけでなく、愛犬・愛猫の身体の健康を保つことにも繋がっているのです。

自宅でのセルフケアはもちろん、動物病院での定期的なチェックも合わせ、適切な処置と正しい**オーラルケア**で、愛犬・愛猫の健康を守ってあげてください。

※自宅でのセルフケア：歯ブラシによるブラッシングやオーラルケア用品の使用。

歯周病になりやすいのはどんなワンちゃん？

- 小型犬 ※もともと歯が小さく、歯間が狭いことが要因
- 短頭種
- 病気やストレスで免疫力が低下している犬
- 高齢犬
- 乳歯が残ったまま永久歯が生えている犬

こんなときは、お口のトラブルかも･･･

- 歯茎が赤みや紫色を帯びていたり、腫れ、出血、膿がみられる。
- 口臭がする
- しきりに口を引っ掻くような動作をする
- 食事を食べにくそうにする
- 口の周りを触られるのを嫌がるようになる。

以上のような子たちは歯周病リスクが高いとされますので、より気配りしてあげましょう。